

「でないもの」でありたい

北 和丈

東京理科大学

日本国際教養学会(JAILA)会員の皆様が当学会にご関心をお寄せになったのには、様々な経緯がありがたきことと存じます。創立時からの会員ではないわたし自身に限って申し上げれば、学会の名称として含まれる「教養」の文言に引き付けられたというのが最大の理由になるのだろうと感じています。全くの偶然ではありますが、大学入学から卒業に至るまでを「教養」学部で過ごし、大学院もその上部組織にそのまま進学して博士課程を終えたことを考えれば、高等教育機関におけるわたしの学修歴は、ほぼ「教養」教育によって構築されたと申し上げても過言ではないかもしれません。さらに付け加えれば、その後に奉職することになった職場は、名称に「教養」の語が明記されているか否かの差はあるにせよ、何らかの形で「教養」を培い育てることを主とした組織である場合が多かったわけですから、教歴を振り返ってみても、わたしは常に「教養」と向き合うことを求められてきたこととなります。

それだけの長きに渡って「教養」と対峙してきたのであれば、「教養」の何たるかについて、費やした時間に見合うだけの深い知見を得ているべきなのですが、率直なところ、今でもわたしの理解は実に心許ないもので、「教養」の姿はなお判然としません。例えば、「教養」は様々な言葉との二項対立で語られることが少なくありませんが、そのような場合には、相手方の「実用」や「専門」のほうが圧倒的に定義も把握も容易であるのに対して、「教養」はせいぜい「実用」でないもの、「専門」でないものといった具合に、否定辞によって消極的に述べるしかないのです。いきおい、そうした二項対立は不均衡なものにならざるを得ず、「教養」の名で括られた膨大な数の物事のあいだに共通項を見つけることは極めて困難です(わたし自身の関心領域に引き付けて申し上げれば、「遊び」なども同じ憂き目を見てきた言葉の一つであり、だからこそヨハン・ホイジンガやロジェ・カイヨワによる「遊び」の考察は、英雄的な試みの様相を呈するのでしょう)。

このような実情を踏まえたうえで、一種の開き直りのように聞こえるかもしれませんが、わたし自身はこのところ、それでよいのではないかと、いう気がして参りました。時代ごと、地域ごとに優勢な価値観が限定的な形で構築されていくなかで、時勢に抗い、時勢を超え、あるいは時勢に囚われず行われる様々な知的営為が「教養」であるとするならば、そこには「でないもの」でしか持ち得ない強みがあるはずで、「であるもの」が折々の要請に応じて目まぐるしく生まれ、滅びていくなかで、「でないもの」も、もちろん姿形は絶えず変化していきますが、滅びることは決してない。周囲の喧騒を批判的・懐疑的な目で睨むもよし、超然とした態度でやり過ごすもよし。「教養」は、囃らずもそういう(せっかちな人には厄介だけれども、長い目で見ればありがたい)役割を担ってきたのではないのでしょうか。

小誌はそういった「でないもの」の良さ受け皿でありたい、「であるもの」を間接的に映す鏡でありたいと思います。今号も、自由闊達な筆致による面白い論考が揃いました。今しか見られない「でないもの」の競演、どうぞお楽しみくださいませ。